

矢作川天然アユ調査会

調査団体名	矢作川天然アユ調査会	団体代表者名	会長 新見克也
設立年	1996年9月	対応してくれた人の名前	新見克也 (株)矢作新報社 代表取締役
団体URL	http://www.ayu-chosa.net/		
活動拠点	豊田市矢作川研究所内	調査員	浅田益章
取材日	2018年2月15日(木)	レポート作成者	浅田益章

活動内容

(設立の目的)

矢作川では平成に入って以降アユが釣れなくなってきたため、この原因を探り天然のアユが豊富に釣れる矢作川を復活させようと考えています。そのため豊田市矢作川研究所と共に、アユを指標にその生活史の調査を行っています。矢作川の釣り人を中心とした団体です

(事業内容)

春の遡上調査に続き、友釣りによる調査、秋の産卵場調査ならびにふ化直後の仔魚の調査、そして三河湾での調査とアユの一生を追跡しています。調査結果をもとにアユの生息上の課題を抽出し、アユの保全のための研究を展開するとともに、アユを通じて河川環境の保護に向けた提言につなげることを目指しています。

キャッチフレーズ

遡れ！天然アユ

故郷の大河、矢作川に本当の清流と天然アユの復活を願う。
さまざまな生き物がすみやすい矢作川を取り戻してゆきたい

会のモットー

矢作川の釣り人が中心ですが「研究者のはしくれ」との意識を持って
日ごろの調査に取り組む

設立から現在に至るまで変化したこと

調査会は22年前に設立された。昔は天然アユの宝庫であった矢作川が年々変わってきた。この10年は遡上してきたアユが一気に育たなくなりました。天然アユは減っていないのだが育たない。矢作川中流域の川底の砂や小石が減少し、健康できれいなアユの餌場がなくなって居なくなりました。50年前に作ったダムの影響でアユが育つ川底でなくなった。

連携している団体・専門家・自治体など

「天然アユ生態調査実行委員会」(会長:矢作川漁業協同組合 組合長 事務局:豊田市矢作川研究所)のもとに産官学民の各団体が参加して連携している。

- ・豊田市 矢作川漁業協同組合
- ・国交省 豊橋河川事務所
- ・豊田市 矢作川研究所
- ・大学のアドバイザー(教授)、専門の研究所、ほか

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ①遡上調査: アユの遡上数を把握。その年の矢作川での資源量を推察。大きさ等の計測。
- ②成長調査: 友釣りによる定点サンプリング。アユのサイズ、天然の判別、釣れ具合の観測。
- ③産卵場・流下調査: 翌年のアユ資源量を推測するためのデータ収集。産卵場の位置を探る
- ④三河湾調査: 三河湾でアユの仔稚魚を採捕し、環境条件や当年の資源量、生育の予測。
- ⑤矢作川感謝祭: 毎年9月開催。矢作川の天然アユを釣り、焼いて、市民は塩焼きをいただく。

現在直面している課題

①矢作川中流域:アユが釣れなくなった要因調査

- ・中流域はアユの餌場である川底の石が大きく絶好の釣り場であるがここ10年ほど深刻な不漁
- ・ダム下流で見られる「アーマー化現象」の典型。健康な川では洪水のたびに川底が洗われるが砂や小石がないためにコケ植物が川底を覆っている。餌となる付着藻類が育たない

②矢作川下流域:川相の平坦化と外来種オオカナダモの大繁殖・駆除対策

- ・オオカナダモは河川勾配が平坦、緩やかで光環境がよいところに育つ。駆除には大変苦勞する
- ・平戸橋下流部から豊田大橋の間の川面の景観を損ねている。アユ生育の河川環境を確保したい

今後やってみたいこと

「健康な川底の創出」 ソジバ再生実験(2年計画 2017.05-2019.03)

- ①阿摺(あずり)ダム下流(通称ソジバ)でアユの生息環境改善の実験を継続中。
(豊田市矢作川研究所) 以前はアユがよく捕れた場所でソジバと呼ばれていた。現在は全く釣れない。その追跡調査を市民グループである「矢作川天然アユ調査会」が友釣り調査で協力する。
- ②矢作川ダムができて30年も経ってから川底の異常が顕著に表れはじめた。最近の10年ほどで急速に悪化している。末期症状だ。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・矢作川の天然アユが育たない現象が顕著になってきた。その対策には矢作ダムを管理する国交省や中流域の小型ダム群(発電)を管理する中部電力株が今回の実験結果をどう受け止めるかが問われる
 - ・オオカナダモの抑制、駆除活動の継続には豊田市民への広報啓発など理解と参加活動が大事である
- (感じたこと)
- 実験結果の検証など多くの連携が望まれる。データ情報の共有も大事である。「天然アユ生態調査実行委員会」を中心に関係者が繋がっている。矢作川流域圏懇談会も貢献できるのではないかと

チームオリジナルの質問

<質問内容>

訪問取材をして一番興味深かったことは、矢作新報社の代表取締役である新見克也さんであった。社名のいわれは？ 経歴と今の仕事。名刺には矢作川漁業協同組合 専務理事とある。そして「矢作川天然アユ調査会会長である。まだまだ本業の傍らいろいろなところとつながっている。地元豊田・矢作川の流域圏を担っているキーマンの一人ではないだろうか。

<答え>

社名のいわれは公募で決めた。社の目指すところは「山から海まで矢作川流域全体を扱いたい」豊田市で生まれ、高知市で魚類調査の仕事と実践研究をして地元に戻ってきた。矢作新報社に入社したころは豊田市矢作川研究所ができたころでした。矢作川の豊かな自然と地域住民を守ろうという機運に満ちていたころである。

「矢作川水族館のこと」(発起人のひとり; 川の魅力・川の実力を伝え、人と川を繋げます)
「矢作川天然アユ調査会」だけでは矢作川の魅力を発信することは片手落ちである。バーチャルの矢作川水族館を作った。子供たちと「矢作川さかな釣り大会」を開催。釣った魚など検量後水族館へ。公害問題を克服再生された今、矢作川アユのブランド化よりも、まずは豊田市民に関心を持ってもらうことが大事と話されました。

その他、伝えたいこと（教えていただいたこと）

①アーマー化現象、アーマーコートとは：

矢作川のアユが釣れなくなった原因の1つは川底のアーマー化現象とのこと。
ダムの下流では、流れやすい小さな砂利が流され、流されにくい大きな石がごろごろと目立つようになります。これを専門家は「アーマーコート化(鎧化)」と表現します

怖いのはその後、時を経て川底がアユなどの生き物が住める場所でなくなっていくことです。
時々洪水が川底を清掃してくれないと、最後は餌にならないコケ類が覆ってしまう。そうならないように対策が必要です

②矢作川の天然アユのこと：

- ・矢作川の天然アユのことは釣り人仲間はよく知っている。秋になると(9月から)釣りに来る
- ・アユが釣れなくなったので舟で釣る人が減った。今は岸からのほうがよく釣れる

③ソジバ(アユの餌場)の問題とは：

ダムがなかったころの昔はアユがたくさんいるところをソジバと呼んでいた。ソジとはヨシなどを束ねたアユを捕るための仕掛けのことである。川底の砂や石の流れの変化で様相が変わったことからアユがいなくなった。

矢作川や天竜川は飛騨川と比べて格段に少なくなったようです。

写真

取材風景（2018年2月15日）

① 矢作川天然アユ調査会会長の 新見克也さん

(株)矢作新報社の代表取締役であり、編集長。

矢作川近辺の活動に関わり多い。
淡水魚類の調査が得意。



(注)

写真・資料は矢作新報社および
矢作川天然アユ調査会のものです。

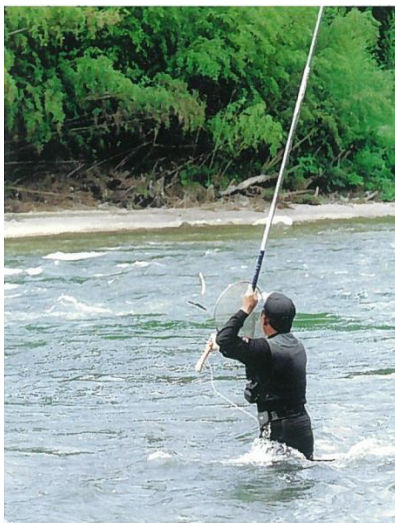
活動状況



② アユの生活史



③ 矢作川（上流）



④ 成長調査
(定期的な友釣りによる採集・釣果比較)



⑤ 産卵場調査
(産卵の時期と産卵場の川床状態)



⑥ ダム下流のソジバ再生実験・記事
(矢作新報・2018年2月2日号より)



- 平成8年9月 調査会発足(6日)
 (榊西日本科学技術研究所生物室長(当時)
 高橋勇夫氏の指導のもと調査開始)
- 平成8年～11年 矢作川アユ生態調査
- 平成11年 16項目天然アユ保全策を提言
- 平成12年～現在 三河湾でのアユ生態調査
- 平成17年 10項目天然アユ保全策を提言
- 平成16年～17年 矢作川に天然アユ大量遡上・豊漁
 現在に至る

⑦ 矢作川天然アユ調査会
(メンバーと沿革)